

東京農業大学・東京情報大学の最新情報をお届けする

新・実学ジャーナル

September
2019
No.161

9



▶研究&教育 最前線

“カッコいい農家”をよりカッコよく
東京農業大学 助教 小川 繁幸

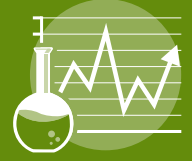
▶ZOOM UP

牛、豚、家禽の畜産総合農場
富士の裾野でいのちを学ぶ

▶「連携を密にし内外に力強く発信」 学校法人東京農業大学 大澤理事長が再任

私の宝もの My Treasure
パスポート 志和地 弘信

学校法人東京農業大学



研究&教育 最前線

The front line of
research
and education



東京農業大学

助教 小川 繁幸

おがわ・しげゆき / 1982年新潟県生まれ。東京農業大学大学院生物産業学
研究科生物産業学専攻博士後期課程修
了。東京農業大学生物産業学部自然資
源経営学科(6次産業化研究室)助教。
博士(経営学)。

- 専門分野：地域経済学
- 主な研究テーマ：持続可能な社会の構築にむけた資源循環に関する研究
- 主な著書等：山村再生ビジネスとマーケティング(共著)(株日本林業調査会)他

「カッコいい農家」をより「カッコよく」 農業女子の視点でワークウェア開発

いま日本の地域社会は、グローバルに展開する市場や少子高齢化の影響で危機的状況を迎えている。日本の食料を支える北海道でもこの問題は深刻で、網走市に立地する東京農業大学生物産業学部(北海道オホーツクキャンパス)は、地域活性化に向けたさまざまな活動を行っている。筆者は数ある地域資源の中でも人々農家に着目し、地域社会を担う「カッコいい農家」をより「カッコよく」魅せる活動を続けている。それにより、次世代を担う若者たちが職業として農業を選択してもらえ、仕掛けを作るのが狙いだ。地域の担い手として特に着目しているのが女性だ。

農業で重要な役割果たす女性

現在、女性農業者は基幹的農業従事者の約40%を占めており(表1)、「農業経営の現場での女性活躍状況調査」(日本政策金融公庫2013年)によれば、女性が参画している農業経営体ほど販売金額が大きく、経営の多角化に取り組み傾向が強いなど、地域農業の振興や農林水産業の6次産業化の展開に重要な役割を担っている。また、女性が経営者又は経営方針の決定に関わる割合は47.1%と(表2)、約半数の農家で女性が経営に参画するなど、女性は農業経営の発展において重要な役割を果たしている。

こうした女性の可能性は、普段、大学で学生と接するなかでも強く感じている。女子学生の比率が年々高まり、目的をもって勉学に励み、自ら積極的に地域で活動している学生は、女性が多いように思われる。本学は地域の担い手を育成し、地域に還すことを目的とした「人物を畑に還す」との教育理念を掲げており、女子学生を地域に還すための仕組みづくりが求められているとも言える。

一方、農林漁業の生産現場でも、生産者が作りた
いものを作れば売れたプロダクトアウト型の時代は
終わり、マーケットインの発想で取り組まなければ
ならない時代となっている。女性ならではのネット

(単位：%)

区分	構成割合
経営者が男性の農家	93.3
経営者以外で経営方針の決定に関わっている者がいる農家	44.9
男女が関わっている農家①	7.3
男性だけが関わっている農家	4.5
女性だけが関わっている農家②	33.1
経営者以外で経営方針の決定に関わっていない者がいない農家	48.4
経営者が女性の農家③	6.7
女性が経営方針の決定に関わっている農家(=①+②+③)	47.1

出所：農林水産省「2015年農林業センサス」

表2 経営方針の決定に関わっている者の状況別農家数の割合

(単位：万人、歳)

	2010年	2015年	2016年	2017年	2018年
農業就業人口	260.6	209.7	192.2	181.6	175.3
うち女性	130	100.9	90	84.9	80.8 (全体の約46%)
うち65歳以上	160.5	133.1	125.4	120.7	120
平均年齢	65.8	66.4	66.8	66.7	66.8
基幹的農業従事者	205.1	175.4	158.6	150.7	145.1
うち女性	90.3	74.9	65.6	61.9	58.6 (全体の約40%)
うち65歳以上	125.3	113.2	103.1	100.1	98.7
平均年齢	66.1	67	66.8	66.6	66.6

注：1 「農業就業人口」とは、15歳以上の農家世帯員のうち、調査期前1年間に農業のみに従事した者又は農業と兼業の双方に従事したが、農業の従事日数の方が多い者をいう。

2 「基幹的農業従事者」とは、農業就業人口のうち、ふだんの主な状態が「仕事为主」の者をいう。

出所：農林業センサス、農業構造動態調査(農林水産省統計部)を参考に作成

表1 農業就業人口及び基幹的農業従事者数

ワーク力や消費者・生活者目線が必要不可欠となっているのだ。

農業女子プロジェクト

そんな女性の活躍に期待し、広く認知されたのが農林水産省の「農業女子プロジェクト」だろう。農業で活躍する女性の姿をさまざまな切り口から情報発信することで、社会全体での女性農業者の存在感を高め、併せて職業としての農業を選択する若手女性の増加を図ることを目的に、2013年から展開されている。このプロジェクトで、女性農業者は「農業女子」と呼ばれ、全国の農業女子が日々の生活や仕事、自然との関わりの中で培った知恵を企業の技術・ノウハウ・アイデアなどと結びつけ、新たな商品やサービス、情報を創造し、社会に広く発信していく活動を展開している。

当初、農業女子37人、企業12社でスタートしたプロジェクトは、2019年7月時点で、農業女子775名、企業は34社にまで拡充している。そして、女性ユーザーの視点を取り入れた多くの商品が開発・販売されている。

しかし、農業へのさらなる女性参入や、女性らしい農業のライフスタイルを提案するうえでは、若年層の女性の取り込みも重要となってくる。そのために農業女子プロジェクトの下で企画されたのが「チームはぐくみ」だ。高校・大学のプログラムと、活躍する農業女子の魅力を結びつけ、農業を志す学生の発掘や動機づけ、意識の向上に取り組むため、2016年に結成された。この企画には、2019年7月時点で7校が参画している。大学として初めて参加した

のが東京農大である。ここで

の活動でテーマとしているのは「Kawaii（かわいい）」。

女子生徒・学生が得意とする価値観で、日本のサブカルチャーとして世界から着目されている。この価値観を、「農」の

領域で展開することで、新たな市場の創出や女性らしいワークスタイルの提案を目的に、「新たなワークスタイルを提案する Kawaii: 農業女子育成プロジェクト」と題して取り組んでいる。

ファッションのトレンドを「農」から

その中で作業着やワークウェアの開発を進めている。今、若者たちの間ではファッションのトレンドとして、ワークウェアが着目されている。そこで、多くの人に農の魅力を伝えるきっかけとするために、あえてワークウェア専門のメーカーではなく、アパレル業界で活躍する企業と連携した。

今、アウトターとして流行しているコーチジャケットを開発した。女子学生の意見を積極的に取り入れて、ポケットのサイズや位置、丈など、すべて農作業の



図1 大学の農業女子プロジェクトとして実施した農機具体験の様子

状況をイメージしながら、理屈と機能美にこだわった。

通常、コーチジャケットはボタンどめだが、農作業で使うと砂が入りこんでしまう恐れがあるためジッパーを加え、ポケットは物が落ちないように斜めにしかも大きく深い形にした。さらに小物が入れる内ポケットを設け、ジャケットの丈はしゃがんでも尻が出ないように長めにし、極めつけは、蚊取り線香をつけるためのフックを設けるなど、こだわり満載である。

このコーチジャケットは、本学の学生だけでなく、カッコいい農家をより、カッコよく魅せるために、地域の農家にも提供し愛用いただいている。農家が何気なく羽織るジャケットが、実はファッションのトレンドであれば、農家はより、カッコよく見えるのではないだろうか。

若い世代が農林漁業に対して抱く負のイメージ（危険、汚い、かっこ悪いなど）を払しょくし、華やかなイメージの強いファッションから農林漁業の魅力を発信することで、若者に農林水産業を選択してもらうための一助となればと思う。



図2 「Universal overall」とのコラボによるコーチジャケット

牛、豚、家禽の畜産総合農場

富士の裾野でいのちを学ぶ

東京農大富士農場



乳牛の人工授精のレクチャーを行う野口准教授(右)

東京農業大学には、学生の実習と研究の場として、富士、伊勢原、網走寒冷地、宮古亜熱帯の4つの農場や奥多摩演習林、オホーツク臨海研究センターなどがある。このうち、静岡県富士宮市、富士山西麓の33ヘクタールに広がる富士農場は、1941年に開設され、農場・演習林の中で最も歴史がある。多くの乳牛、肉牛、豚、家禽などを飼育しており、実際に肉牛、豚、生乳、ホロホロチョウの卵などの生産・販売で、毎年約2000万円を売り上げる、ほんもの農場だ。この農場で、学生たちは実学の知見を身に付けていく。

(東京農業大学客員教授・鈴木敬吾)

農大ブランドを目指して

富士農場では現在、乳牛ではホルスタインをメインに、ジャージー種、ブラウンスイス種、エアシャー種の4種20頭、肉牛は黒毛和種、褐毛和種の30頭、豚は大ヨークシャー種、パークシャー種など5種40頭、家禽では採卵鶏のほかに、実用の家禽としてホロホロチョウ、横斑プリマスロツク、ロードアイランドレッド、天然記念物の矮鶏チャボ、小地鶏などを500羽程度飼育している。

このうち、肉牛では東京農大ブランド化を目指す「農大和牛」が成長している。霜降り肉が有名な黒毛和種の卵子に、脂肪分が少なく赤身が美味しい褐毛和種の精子を体外で受精させ、1週間培養、発育した胚を凍結した。これをホルスタイン1頭に2個移植し、双子をませた。1頭は牧草中心の餌を、もう1頭には輸入穀物が中心の餌を与えている。8月現在21カ月齢で、通常30カ月齢前後で出荷されることから、この2頭の「農大和牛」がどのような牛肉となっているのかは、今年度中に開催される試食会で分かる。

ホロホロチョウは、フランスやイタリアでは肉用に多く利用されている。卵は殻が鶏卵に比べ2.5倍の強度で割れにくく、卵黄中のコレステロールが少ないと



牧草で育てている農大和牛

いう特徴がある。この卵を使って「農大ホロホロプリン」と、アイスのようにプリンのような「農大カタラーナ」の2種を厚木市の製パン会社と共同開発し販売している。濃厚でクリーミーな味が評判だ。

農学部で実習する学生は厚木キャンパスの農学部が中心になる。

農学部には農学科、動物科学科、生物資源開発学科、デザイン農学科の4学科がある。東京農大は「実学主義」を教育方針に掲げており、農学部は実習が多い。特に1年生は毎週金曜が何かしらの実習に充てられている。昨年度からは富士農場での実習が1年の全学科共通となった。「家畜・家禽がどのように育てられ、私たちのいのちのちとなる肉や乳を生産しているのか。農学部の学生ならば学科を問わずしっかりと学んでおくべきだ」と考えからです。農場長の桑山岳人教授は狙いを説明する。研修センターに宿泊する1泊2日の実習を2回重ね、乳牛+肉牛、豚+家禽の両コースを学ぶ。

卵の黄身が黄色いのは

7月末、動物科学科1年生の実習を見学した。実習は8人程度のグループに分かれて各コースのポイントを回る。家禽では、さまざまな種類の鶏の羽を押さえて動かないようにする「保定」の仕方を学び、体重を量っていた。6種の鶏は、色形、大きさも全く違う。最も重いのは肉用種のレッドコーニッシュで6.5キログラムもあった。

この後、グループは採卵鶏の餌が成長段階に応じて5種類もあることを学んだ。学生たちに餌の成分表示を読ませた桑山農場長は「成鶏の餌に入っているカルシウムやパプリカは何のために必要か？」など、次々に質問し、「あなた、なぜだと思う？」と学生を指名して答えを求める。カルシウムは卵の殻に必要で、パプリカは卵黄の黄色を濃くするためで、これがなければ黄身は薄くなる。驚いたり、感心したり、答えを聞きたび、学生たちはそれぞれの反応を素直に表情に出し、楽しんでいようだった。

大合唱

豚舎ではちょうど指導で餌やりの時間だった。豚が餌箱で夢中になっている間、学生たちはシャベルで糞をすくい、一輪車に入れていく。餌の順番が回ってきていない区画の豚たちは、早く早くと鳴きわめく。ものすごい音量だ。糞尿のにおいもきつい。それでも、学生たちは淡々とした表情で糞すくいを続けていた。乳牛舎では搾乳の実習だ。乳頭内に残っている



飼料の成分の違いを説明する桑山農場長(右)

乳を出す前搾りをした後、乳頭をきれいな布でふき取り、搾乳器を装着する。手順の説明を受けた学生たちは、「はい、やってみよう」と言われても、乳牛の前で、どうしたらいいのか戸惑っている。そんな時、学生たちの手助けをしていたのが技術練習生たちだった。高校卒業後1年間、農業実務の知識と技術の研修を受け、成績良好ならば農場長の推薦を受けて東京農大への推薦入試を受けることができる。東京農大の4農場で受け入れており、富士農場では8人が共同生活をしながら、家畜の育成方法や肥育技術、牧草地の管理まで畜産に関する技術を体系的に学んでいる。長野県出身の倉科和郁さんは小柄な体をてきぱきと動かし、作業を手伝っていた。「いろいろな動物のことを学べるのが楽しい。農学部動物科学科に進学して、アニマルセラピーを学びたい」と話していた。

いのちを創る

繁殖牛舎では、ちょうど発情期を迎



豚の給餌。隣り合っている豚の鳴き声だつた



乳牛の搾乳をする学生(中央)とサポートする練習生

えた乳牛に人工授精の作業が行われるところだつた。教育研究部の野口龍生准教授が左手に肩まで届く長いビニールの手袋をはめた。その腕を鉄枠で固定された乳牛の肛門から直腸に入れていく。直腸の腸壁越しに子宮の位置を確認すると、右手に持った長さ40センチほどの金属製注入器を膣から挿入した。注入器の先端には、液体窒素で凍結保存された、温水で解凍した精子をいれた細いチューブが付いている。注入器が子宮内に届いたのを確認すると右手の親指で押し子を押し精子を子宮内に押し出した。事前の超音波画像による確認などを含めこの間、約20分。20人ほどの学生は息を凝らして、野口准教授の動きを凝視していた。聞こえる声は野口准教授の説明だけ。私語は全くない。注入器が抜かれると、学生たちから「ふーっ」と吐息が漏れた。乳牛の真後ろから見つめていた宗像杏さんは「いのちが創られる瞬間を見ました。すごかった。緊張しましたが、今までの実習の中で一番面白かった」と目を輝かせて語っていた。

他学部も実習に利用

厚木キャンパスの農学部以外にも、世田谷キャンパスの国際農業開発学科、森林総合科学科、生産環境工学科、国際バイオビジネス学科などが実習などに利用している。富士山の麓、広大な農場での学びには、教室や研究室では絶対に得られない知見があるはずだ。

「連携を密にし内外に力強く発信」

学校法人東京農業大学 大澤理事長が再任

学校法人東京農業大学は7月16日の理事会で大澤貫寿理事長（74）を再任した。大澤理事長は3期目で、任期は2023年までの4年。学校法人東京農業大学は、今年4月に東京農業大学稲花小学校を開校したことで、小学校から大学院までを擁する学園化構想が完成した。この学園体制は各大学・学校にどう影響するのか、また、法人全体の方向性をどう考えているのか、大澤理事長に語ってもらった。



12月に完成予定の東京農大世田谷キャンパス新研究棟。世田谷キャンパス内の全学科が同じ建物に入ること、学部学科を横断した教育研究のさらなる展開を図る。

社会の大きな変化に対応

今、社会は大きな変革期を迎えています。超情報化社会 Society (ソサエティ) 5.0 に突入し、経済は労働集約型から知識集約型へと移行しつつあります。AI（人工知能）が一般化し進化していく社会では、人間に求められるのは、知識を基盤に新しいアイデアや構想を生み出す創造性やコミュニケーション能力であることは明らかです。そうした大きな構造変化に対応した教育研究を、法人としてどう実践していくかが問われています。

大学に関しては、都市部と地方での大学の序列化が進み2極化、さらに3極化と格差が広がっています。東京農大と東京情報大では、これまで入試制度改革や、新学部設置、学科再編、広報強化など、さまざまな手立てを間断なく進めてきてきました。しか

し今後18歳人口が100万人を割り一層の厳しさを迎えるにあたり、さらに時代の変化に即した適切な対応が求められています。いかにそれぞれの学部学科の特色を打ち出していくか、そして教育の質的向上や研究の高度化、グローバル化などを通して学生の質を保证する出口管理を徹底し、大学の社会的発信力を向上させていくことが基本です。それぞれの大学が置かれている状況の中で、自らの所属する学部学科の長所・短所を客観的に評価できる教職員がどの程度いるでしょうか。学部長、学科長の下、教職員一体となった対応を進めていく体制を整えることが喫緊の課題だと考えています。

洞察力に富んだ思考力の育成を

少子化時代の私学の初等・中等教育は、人間と社会について深い見識を持った主体的で洞察力に富んだ

学校法人東京農業大学 各学校開設年	
1891	東京農業大学の前身となる徳川育英会私立育英農科が開設 1893年、私立東京農学校と改称 1925年、大学令による東京農業大学となる
1950	東京農業大学附属第一高等学校（全日制普通科） 1962年、東京農業大学第一高等学校と改称
1962	東京農業大学第二高等学校（全日制普通科）
1985	東京農業大学第三高等学校（全日制普通科）
1988	東京情報大学
2005	東京農業大学第一高等学校中等部
2009	東京農業大学第三高等学校附属中学校
2019	東京農業大学稲花小学校

これまで、施設、設備の整備にも力を入れてきました。東京農大では研究拠点となる世田谷キャンパスの研究棟、厚木キャンパスの実験実習棟や改組に伴う施設、設備の拡充を進め、東



今年4月新たに開校した農大稲花小。男女共学で、第一期生72人が学んでいる。

施設・設備を充実

思考力の育成に努めることが重要です。特にAIによる代替が不可能な分野で新たな職能に対応できる柔軟な能力、そして未来の変化を予測、理解し主体的に判断できる能力の育成が必要です。これまでの教育方法のあり方を見直し、少人数対応授業法や研究指導法さらに評価のあり方まで見直していく必要があります。またこれからは、多様な年齢層やさまざまな国籍を持った学生・生徒・児童が教育を受ける時代になっていきます。法人や各学校のIR（財務情報や学習成果の調査分析など）の必要性が高まってきています。これら各種データと各学校が独自に設計したeポートフォリオの組み合わせによる学習指導ツールの開発が必須となり、そのための基盤整備を進めていかなければならないと考えています。

これからの学校法人の経営は、少子化と文部科学省の定員管理の規制が厳しくなるなか、量的拡大から質的再編の方向に舵を切らざるを得ないことは明らかです。これらを踏まえ策定した第三期中期計画と中長期財政計画の下、安定的財源を確保し、収支の均衡を図り、確かなデータに基づいた経営基盤の確立に努めていきます。法人の使命は、小中高から大学における教育・研究の独立性を尊重し、それぞれの発展を支援することにあります。そのための努力は

経営基盤のさらなる確立を

今後、大学間や小中高との連携を一層密にし、学校法人東京農業大学としての将来ビジョンを明確にし、教育研究を国内外に広く発信して信頼を勝ち得ていかなければならないと考えています。特に、情報教育や国際化への対応を一層推進していく必要があります。さらに法人と各学校のガバナンスのあり方や組織の効率化を進めるため、教員・事務職員と学生の情報の共有化を一層図ることが大事だとの認識に立ち、法人と各学校の事務体制の見直しを進めていきます。

学生支援の強化と事務体制の見直し

京情報大では看護学部実習棟を、中学校ではキャンパス整備や情報通信設備の充実などを積極的に図ってきました。さらにこれまで東京農大が蓄積してきた教育資源の活用を図り、独自の質の高い教育を通して地域での発信力の向上と併設校連携強化の一環として農大稲花小を開校し、法人の学園化を進めてきました。

惜しみません。

大澤 貫寿

おおさわ・かんじゅ／1944年茨城県生まれ。東京農業大学農学部農芸化学科卒。77年から79年米国カリフォルニア大学バークレー校博士研究員。91年から東京農業大学教授。その後、大学院農学研究科委員長、応用生物科学部長などをつとめ、2005年から13年東京農業大学長。2011年から学校法人東京農業大学理事長。その他、いばらき大使。内閣府食品安全委員会委員。相馬市復興会議「顧問会議」委員など。



私の宝もの

My Treasure

第13回

パスポート

東京農業大学 国際食料情報学部 教授 志和地弘信

しわち・ひろのぶ／1960年鹿児島県生まれ。鹿児島大学連合農学研究科生物生産科学博士課程修了。農学博士。東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授。専門は熱帯作物学など。

パスポートを20冊くらい持っています。普通のもの以外に公用、国連発行のものもあり、公用は1回だけのものごと数次とありますから、計4種類ですね。

東京農大を卒業後、JICA（国際協力機構）で研修を受け1988年、青年海外協力隊員としてネパールに派遣されました。首都カトマンズから東へ70^{キロ}離れた村で電気、水道、ガスが無い家に住み、2年間、現地の人たちに野菜生産の指導をしました。その翌年からは「スペシャリスト」として3年間、さらに1994年からは「スペシャリスト」として2年間、ネパールで農業指導を続けました。公用パスポートはこの時代のものです。

ネパールは計7年間過ごしたので、最も思い出深い国になりました。ちょうど、最終的に王政の廃止に至る民主化運動が高まっていた時期でした。カトマンズから西へ200^{キロ}のポカラという都市で、プロジェクトリーダーをしていた時、運動が暴動に発展しました。事務所近隣のイギリスの事務所が放火されると自宅に連絡が入り、事務所のトラックを出しておかなければと、バイクで向かいました。しかし、途中で暴徒に捕まってしまい、政府側の人間とみられ、バイクから降ろされて小突かれました。鉄パイプで殴られそうになった時、知人と目が合い、必死でアピールすると、彼が「日本人だ、日本人だ！」と叫んでくれ、寸前で助かりました。

国連のパスは、ナイジェリアにある国際熱帯農業研究所（IITA）に2000年から04年まで勤務していた時のものです。この時も、出張の最中、フロントガラスに大きな石をぶつけられ車を奪われるカージャックの被害に遭いそうになりましたね。マラリアも4回、かかっています。

パスポートのページをめくると、そんな思い出がぱっと、鮮やかによみがえります。もちろん危機一髪の間だけじゃなく、収穫が増えて感謝されたり、家族も一緒でしたから、その思い出も。

近年、協力隊員のなり手が少なくなり、困っているそうです。東京農大はJICAに最も多くの人材を送り出している大学です。学生諸君には「誰かがやらなければならない仕事だ。志をもって農業を学んだ君たちがやってみないか」と呼びかけています。

（まとめ・東京農業大学客員教授、鈴木敬吾）



▲色とりどりのパスポート。東南アジア、アフリカの主要20カ国をすべて旅したという。



東京農業大学の沿革

榎本武揚と横井時敬

創設者は、明治の英雄榎本武揚だ。明治政府で通信相、農商務相、文相、外相などの要職を歴任した榎本は、1891（明治24）年、東京に「私立育英塾」を設立した。その農業科が東京農学校、東京高等農学校と名を替えつつ、拡充の歴史を歩み、今日の東京農業大学となる。東京農学校時代の1895（明治28）年、評議員として参画したのが、明治農学の第一人者横井時敬だった。「人物を畑に還す」「稲のことは稲にまかせ、農業のことは農民にまかせ」と唱えて、「実学」による教育の礎を築き、東京農業大学の初代学長を務めた。本学の「生みの親」は榎本、「育ての親」は横井である。

高等教育から初等教育まで

東京農業大学は、農学部、応用生物科学部、生命科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部、生物産業学部の6学部23学科からなり、大学院は2研究科20専攻体制が整っている。世田谷、厚木、北海道オホーツク（網走）の3キャンパスに約13,000人が学んでいる。学校法人東京農業大学の傘下には、東京情報大学（千葉）があり、総合情報学部、看護学部の2学部2学科と大学院1研究科に約2,000人が学ぶ。また、併設校として農大一高／中等部（東京）、同二高（群馬）、同三高／附属中学（埼玉）がある。2019年4月、東京農業大学稲花小学校が世田谷に開校。

2019 | 東京農大創立128年

学校法人東京農業大学

- ◆東京農業大学
- ◆東京情報大学
- ◆東京農業大学第一高等学校
- ◆東京農業大学第二高等学校
- ◆東京農業大学第三高等学校
- ◆東京農業大学第一高等学校中等部
- ◆東京農業大学第三高等学校附属中学校
- ◆東京農業大学稲花小学校